

## 第6期第2回生涯学習センター運営協議会 議事録

〔日 時〕 2022年7月29日（金）10：00～12：00

〔場 所〕 町田市生涯学習センター 6階視聴覚室

〔出席者〕 委 員：陶山 慎治、古里 貴士、瓜生 ふみ子、西行 恵、大野 敏美、  
橋本 空、清水 静香、西澤 正彦、堂前 雅史、沖 悦子、  
三浦 芽依 （以上 11名）

事務局：西久保センター長、平林担当課長、岡田管理係長、瀧澤事業係長、  
小泉担当係長、腰本主任、菊島主任、三橋主任

〔欠席者〕 なし

〔傍聴者〕 4名

〔内 容〕 1 報告事項

- （1）センター長報告
- （2）東京都公民館連絡協議会報告

2 議 題

- （1）事業の見直しについて（1）

3 その他

- （1）2022年度運営協議会開催日程について

〔資 料〕 1 生涯学習センターにかかる答申・報告等一覧

2 生涯学習センターの事業一覧

3 生涯学習施設（生涯学習センター・公民館）を巡る問題

4 第6期運営協議会2022年度日程（案）

5 東京都公民館連絡協議会第3回委員部会報告

6 生涯学習センター 年度別利用状況

7 第6期第1回協議会議事録

## 〔議事録〕

### 1 第2回運営協議会開会

センター長による開会挨拶

B委員、C委員がリモートで参加する旨、報告。

事務局より配布資料の確認。

事務局より、第1回議事録の内容確認。

### 2 報告（1）センター長報告

会長：内容に入る前に全体の流れを整理しておきたい。議題の（1）「事業の見直しについて」、ここがメインである。それぞれの立場から意見をいただき、議論していきたい。前回、「まだ、生涯学習センターそのものが理解しきれていない」といった意見や「自分が何を求められているのか見えていない」といった意見があったが、その点も含めて意見をいただいてよろしいかと思う。

ここでもう一度整理しておきたい。皆さんに議論いただいたことが何に影響するかということだが、前回、説明があったとおり、町田市生涯学習センターは答申を受けて「生涯学習センターのあり方見直し方針」を策定している。これがまずベースにある。私たちは今日以降、議論を積み重ねていくわけだが、この議論を踏まえて、行政は方針の実行計画を作っていくことになる。ここでの議論は、実行計画に反映される大切な議論である。本日の議題のところでは、それぞれの立場で結構なので、5分程度お話いただきたいと考えている。この点を頭に留めながら、行政の報告を聞いていただきたい。

では、報告（1）について、センター長から報告をお願いしたい。

センター長：いくつか事業の紹介を行いたい。まず、「平和祈念事業」だが、本日からイベントとして地域のセンターで映画上映会を開催している。8月5日からは生涯学習センターで本イベントとして、イベントや講演会、子ども将棋教室などを行う。中央図書館でも関連した展示を行う予定である。

それから、町田第一中学校で地域利用が8月1日から開始される。武道場、交流ホール、多目的室、音楽室、調理室を市民向けに貸し出す。学校の授業のない月・火の夜と土・日・祝の日中が利用可能で、近隣住民の方には減免制度もある。生涯学習センター同様、施設予約システムで予約が可能となっている。

また、町田一中では、図書室の開放を行う。これは市内で初めての事業である。学校図書の貸し出しはできないが、勉強する場所として使用できる。毎週土曜日と第1・3・5の日曜日に開放し、中学生だけでなく大人も利用可能である。また、図書館の自習室と異なり、学習支援員として大学生を配置し、学びの支援ができる施設を目指している。

それから、コロナの状況であるが、かなり増えてきている。ただ、以前のよう

に休館や夜間閉館といった利用制限をかけるといった話にはなっていない。しかし、ワクチンの接種は急がれることから、現在、週末を中心に行われている施設7階でのワクチン接種は、秋口には拡大される見込みである。正式に情報が入れば、改めて皆様にお伝えしたい。

会長：今の報告に関し、質問、意見などあれば伺いたい。新しい委員もいるので、私からも補足したい。生涯学習の役割の一つとして、「この国が二度と戦争に巻き込まれない、起こさない」ために平和祈念事業を大切にしている。過去を学んで未来に繋いでいくという、重要な位置づけの事業である。

また、町田一中についてだが、現在、町田市全体で、小中学校の再編が計画されている。計画では「新しい学校には地域に開放するスペースを必ず入れていく」ことになっている。子ども達の学べる環境を最優先するのは当たり前であるが、地域のニーズにも応えていこうということで、町田第一中学でパイロット的に始められている。町田には、ここ1館しか生涯学習センター・公民館がない現状があり、公民館と位置づけは違うが、様々な学べる環境を展開していこうという取り組みなので、興味を持って見守りたい。

G 委員：町田一中の特別教室の開放について、もう少し伺いたい。生涯学習センターやコミュニティセンターと同じように団体登録をして、機械で申し込むのか。

事務局：生涯学習センター同様に、まず、書面で団体登録していただき、その後は施設予約システムで時間の制約なく利用申し込みが可能となる。抽選申込期間終了後に空き予約期間になるのも、生涯学習センターと同様である。

図書室については、利用者カードを発行し入退館をチェックする。子どもセンターの入退館と同じである。学校なので、セキュリティ面を考慮し、このような形をとっている。

G 委員：施設の貸し出しの際、備品は借りられるのか。例えば、調理室を借りた際、調理用具は貸し出されるのか。

事務局：備品の貸出は、学校なので制限がある。調理室の例でいうと、ガス台や電子レンジなどは使用可能だが、皿やフライパンなどの食器や調理用具は貸し出せない。

G 委員：これから学校の統廃合が進み、学校に地域利用のスペースを作っていくという話を聞いている。その際、セキュリティの問題や子どもたちの学習環境の問題など、どれだけ守れるのか気になっている。その点についても十分に検討して進めていただきたい。

事務局：学校との調整の中でもセキュリティの問題は重要視している。入館者の把握についても、現在、防犯カメラの増設を検討している。備品の貸出でも、貸し出せる備品を限定するなど、配慮しながら進めている。町田一中は最初の事例であり、これから検証していくべきこともたくさんある。まずは開いていき、地域の方と

話をしながら、進めていきたい。

### **3 報告（2）都公連報告**

会 長：続いて、東京都公民館連絡協議会報告である。K 委員から報告をお願いしたい。

K 委員：詳しくご存じでない方もいるので、まず、東京都公民館連絡協議会（以下、「都公連」という。）について説明する。これは、東京都内の公民館を持っている自治体の集まり、協議会である。東京には 23 区を始め、多摩地区にもたくさんの自治体があるが、現在は 11 市が加盟している。他の自治体は生涯学習センターなど他の施設になってしまっており、公民館という形では存在していないようである。町田の場合、生涯学習センターと公民館が並列したような形で、他市とは異なる形になっているが、今のところ、参加している。

報告事項だが、都公連にもいろいろな組織があり、そのうちの企画委員会が 6 月 24 日に行われた。都公連では、毎年、研究大会を開催しているが、今年度の大会について、2 月 4 日に小平市福祉会館で開催が決定した。テーマは次回、検討することだが、案が出ているので資料を添付している。今年度は対面方式で実施を予定している。

協議事項として、都公連委員部会運営委員会、私はここに出席しているが、前回議事録の確認と、研修会の案が提示され、了承された。研究大会とは別に、委員部会では年に 1 回研修を企画しており、今年度は 10 月 1 日に国分寺市で東京芸大の倉持先生を招聘し「コロナ過を経験して見えてきた新しい公民館のあり方」をテーマに、開催を予定している。研修は事例発表という形で検討している。

なお、公民館連絡協議会は、東京都のほか、関東甲信越、全国というブロックがあり、それぞれに研究大会と研修を実施している。紛らわしいが、今回は東京都の研究大会、研修について報告があった。

会 長：ただ今の報告について、質問や意見があれば伺いたい。特になければ、次に進めたい。

### **4 議題（1）事業の見直しについて（1）**

会 長：議事に移る。議題（1）「事業の見直しについて」の 1 回目である。事務局より資料の説明をお願いしたい。

事務局：資料に沿って説明する。資料 1・2・3・6 を用意いただきたい。

資料 1 「生涯学習センターにかかる答申・報告等一覧」であるが、これは生涯学習センター設置以来、生涯学習審議会、生涯学習センター運営協議会、及び市の政策経営部で行っている行政経営改革プラン、事業仕分けなどでいただいている生涯学習センターへの意見を箇条書きしたものである。

生涯学習センターは設置して10年目となるが、この間、審議会からは5つの答申を、運営協議会からは4つの報告をいただいている。また、「行政経営改革プラン」でも生涯学習センターへの言及があり、今回のあり方見直しの契機となっている。事業仕分けは、後に市民参加型事業評価に変わったが、市民が市の事業に対し、評価を行う仕組みである。2011年のものは、センター設置の前年、公民館時代に受けたもので、こちらの意見も一部踏まえて、生涯学習センターを設置している。センター設置後も、2回、対象となり、ご意見をいただいている。

これらのご意見を集約すると、概ね、①連携・ネットワークの構築②課題解決型への移行③施設の認知度向上④地域展開の実施⑤電子化の拡充⑥運営コスト見直しの6点に集約されると受け止めている。

資料2「生涯学習センターの事業一覧」であるが、こちらは生涯学習センターの事業を一覧表にまとめたものである。今回、ご意見をいただくにあたって、事業を確認していただくための基礎資料として事前に送らせていただいた。個別の事業説明については、議論の時間を確保するため割愛させていただく。

資料3「生涯学習施設（生涯学習センター・公民館）を巡る問題」であるが、現在、運営協議会で皆さんに生涯学習センターの事業について意見を伺っているが、並行して職員側でも検討を行っている。こちらは職員間の検討資料を、現場の意見を説明するために配布している。

まず、前提の部分だが、我々職員も「町田市における生涯学習」を推進していく立場にあり、生涯学習の拠点として、この生涯学習センターを守っていくことを考えている。これについては審議会、運営協議会ともに若干の差異はあっても、基本的には同じ方向性でご意見をいただいていると認識している。

一方で、我々は「行政組織」であり、本日、参加いただいている委員のように「生涯学習が大事だ、必要だ」と考えてもらえる方以外の市民意見も意識する必要がある。中には、「そもそも生涯学習センターが必要なのか」といった意見や「自分は使わないので、あってもなくてもいい」といった意見もある。実際に事業仕分けでは厳しい意見もいただいております、以前、同じ市の生涯学習施設である「文学館」は「その必要性から検討すべき」という厳しい意見を出されたことがある。

昨年度は都公連の館長部会幹事市だったこともあり、他市の状況を伺う機会もあったが、他市の施設でも「利用者の減少」や「特定の人を使う施設というイメージ」は課題としている自治体が少なくない。

町田市の場合、立地の良さもあって、資料6「生涯学習センター 年度別利用状況」にあるとおり、2020年度からのコロナの影響は別として、利用者数は大きく下落はしていない。ただし、一昨年度実施した利用者アンケートでは、

月1回～数回、定期的に利用する方が全体の45%を占めており、利用数の約半分はこうした常連の方によるものだと考えられる。

利用者数の増減については、現状、町田市では、それほど問題視はしていない。資料にもあるとおり、かつては、入館者数を増やすことが目的とされていた時期もあったが、現在は、むしろ、事業の内容が問われていると考えている。ただし、埼玉県深谷市のように首都圏でも、立地条件によっては利用率が3割台に落ち込む施設が出てきているということは、一つの警鐘として受け取っている。

また、事業についても、平日の日中に開催が集中する傾向があり、結果的に「平日学べる時間のある方」に参加者が限定されることは、「特定の人を使う施設というイメージ」を助長する一因だと考えている。

「生涯学習」は義務ではないので、全ての市民が利用する必要があるわけではない。ただし、「行政」としては、利用しない市民の方からも「不要」だと思われたい施設にしなければならないと考えている。使わない市民からも「こういう施設は必要だ」と思われる施設にしていきたい。

このため、職員の検討会においては、資料下段に記載している3つの視点「①顧客を利用者・学習者だけに限定しない」「②10年後、20年後の利用者をイメージする」「③誰が担うのが利用者・学習者にとって最良なのか」という視点を重視している。

事務局からの資料の説明は以上である。

会長：冒頭でもお話したように、時間をかけて、皆さんから意見をいただき、議論していきたい。まず、ただ今の事務局の説明について、質問などあれば、伺いたい。

資料として、過去にいただいている答申等の一覧がある。また、近隣の自治体では利用者が集まらなくなっているという現実もあった。整理すると、私自身もそうだが、生涯学習センターが町田市民にとって価値があるところで、どんどん活性化していったらいいと思う。学校再編なども含めて、学べる環境がどんどん町田市中に広がっていけばいいと思っており、ここでは、そういった考えをお持ちの皆さんに参集していただき、どうやって盛り上げていこうかという話をしている。一方で、そこにあまり興味を持っていない市民に対するアプローチも必要である。前にも申し上げたが、それなりに予約でいっぱいのレストランのようなもので、お馴染みのお客様から好みを聞きながら作り続けているから、それなりに予約はあるが、行かない人は行かない。生涯学習センターのファンは確実にいて、「市民大学に落ちてしまったのが、とても残念だ」という方は、多数いる。そういった方に対し、次回、どうやって受け取っていただくかということに職員の眼も行きがちになる。ただ、アンケートを取ると、

まるで興味がないという市民もずいぶんいる。その方達を放っておいていいのかという話である。こうしたファンからアンケートを取ると、「もっとこうしてほしい」といった意見が出てくるが、それだけに引っ張られていいのかと思うところである。

それから、ちょっと前までは生涯学習センターを使っている市民の平均年齢は60代だったが、それが今、70代になっている。このままだと80代、90代になっていく可能性がある。こうした状況で、若い方たちに参加していただく、興味を持っていただくにはどうしたらいいかということで、今期の委員には次世代を担う、若い方にも参加していただいている。

資料4に、今後のスケジュールがあるが、第3回、4回と進んでいくと、行政から計画の骨子が出され、計画について具体的に議論していくことになる。今日は実現性に関わらず、皆さんから「こういうことができる」「こういうことができたらいいい」といった前向きな意見をお伺いしたい。

A 委員：事務局に伺いたい。生涯学習センターを知らない人たちがいるということだが、世代とかの要素もあるのだろうが、「興味がない」、「知っているが、興味がない」という方の、興味のない理由は把握できているのか。

事務局：難しいが、そもそも生涯学習センターを知らないという市民は多くいる。アンケートを取った際、市民センターなど地域でもアンケートを取ったが、生涯学習センターから遠ければ遠いほど、認知度は低下する傾向があった。また、興味については、学生などは既に自身の学ぶ場はあるわけで、それ以上に時間を使ってここに来る理由があまり見いだせないのではないかと。学習スペースがあるので、一部、そういうところを使っている方はいる。

講座に関していえば、先ほど平日日中に講座が集中している傾向について話したが、開催日時が参加しにくいというものもあるのではないかと。テーマも固定されており、ファンはいるが、今の時代に即したもののなかを検証が必要だと考えている。

A 委員：今の説明を受けて、若い委員にどうして来ないのか伺ってみたい。

会 長：この点は、今までも議論があり、一つに「生涯学習センター」や「公民館」といった名称が固いのではないかと話があった。他市では名称を親しみやすく変更している事例もある。また、一方では「公民館」という名称を大切に考えている方々もいる。

そもそも、勉強が嫌いな人もいて、全員が全員、勉強したいのにできないというわけでもない。ただ、例えば図書館に一度行ってみると、図書館のファンになる方というのも確実にいて、「図書館に来たければ、来ればいいい」という方もいたが、「図書館に来てもらう工夫」も必要ではないかという議論があった。

I 委員：若者が来ない理由だが、「生涯学習」という言葉が自分達に関係のあるものとして認識しづらいのはあると思う。私自身も、今、所属している学生団体の会議の場所、参加しているガクマチの開催場所というイメージはあるが、自分から学ぶために来る場所という実感は、まだ、あまりない。自分たちが来る場所であると認識しづらい。あと、情報が届いていないというのもある。大学生に届けるには、学習スペースを活用すべきである。学生の「学習できるスペース」に対するニーズは高い。大学でも、図書館の学習スペースは混雑していて、学生は「学習できるスペース」を求めている。それに自由に使える電源と Wi-Fi 環境。これが揃うと学生は集まると思う。

H 委員：私は学生時代から生涯学習センターを使っていて、今も使っている。社会人 2 年目となり、個人的に感じているのは、大学生の頃は学習する機会があった。地域で活動し、それを大学での学びにつなげることができていたが、社会人になると、自分で獲りにいかないと学ぶ機会が全然ないと痛感している。生涯学習センターのような場が、若い人に使われるのは大事なことだと感じている。生涯学習センターを知らずに社会人になって、存在を知らないまま忙しくなってしまう、どんどん遠のいてしまうのではないかと思う。比較的時間のあがる学生時代や高校生、中学生の頃に、こういう学ぶことのできる施設があつて、施設も借りられるということをお教えしておくといいと感じている。

もう一つ、情報が届いていないというのは、正直、感じているところである。生涯学習センターではツイッターで配信しているが、既に若者はツイッターをメインで見ない世代になってきている。私はよく生涯学習センターを利用するが、チラシやポスターもきれいに配置されていて、手をかけていると感じているが、バタバタしていると、そこに目を向ける余裕がない。スマホなどで情報収集する部分が多いので、何か情報を届ける工夫ができないかなとは感じている。

会 長：お二人に伺いたい。生涯学習センターの「生涯」という言葉は「生涯現役」の「生涯」とは異なる。現役を引退した方がいくつになっても学び続けるということではなく、生まれてから誰でも、いつでも、どこでも、という意味合いで使っているが、若い人に聞くと、生涯学習センターは高齢の方が行く場所というイメージがある。「生涯現役」の「生涯」のイメージで、いくつになっても現役というイメージで使われがちだと感じている。お二人にもそういう印象があつて、元々、私達が行く場所ではないという感じだろうか。

I 委員：それはあると思う。生涯現役の印象は、やはり強い。

会 長：お二人とも、地域と学生時代から関わるのが大切と考え、活動してきた方達だが、学生時代、高校生とか大学生の頃、周囲には、あまり「学ぶ」ということを意識せずに、学校のテストに答えることだけが学びと考える人もいた



と思う。もともと、図書館が嫌いな同級生もいたかと思う。お二人は特別かなと思うが、お二人ではない若者が、「生涯学習センター」と聞いたら、どんな印象を持つか。想像で構わないので、教えていただきたい。

H 委員：実話だが、私の友人は「生涯学習」と聞いて「障がい者の学習」と取り違え、障がい者支援センターをイメージしていた。「生涯学習」という言葉が聞き慣れない若者は多い。「しょうがい」と言われ、「生涯」という字はなかなか出て来ない。一方で、社会教育課程や社会教育士といった制度が整備されていて、そういう学部が専門でできている学校も増えてきているので、専門で学んでいる学生が増えてきている印象はある。

会 長：なるほど。続いて、J 委員のご意見を伺いたい。

J 委員：高校生の娘に生涯学習センターの印象や求めるものについて聞いてみたところ、そもそも生涯学習センターを知らなかった。公民館というと知っていて、友達と駐輪場や自習スペースは利用しているようである。先ほど名称の話があったが、娘は「生涯学習センター」は言いにくい。「公民館」の方が3音節で言いやすいと話していた。私などからすると「生涯学習センター」のほうが、名前から事業内容を把握しやすいが、若い世代からすると、「呼びやすさ」や「馴染みやすさ」が大切のようだった。また、高校生が求めるものは、駐輪場と学習スペースとのことだった。先ほどから話が出ているが、中学生や高校生、働いているお母さんの生活を見ていると、生涯学習センターに行っても何かを学ぶ時間を確保するには、すごく忙しそうで、「必要としていない」とまで言うと言語弊があるが、そこに費やす時間が取れない。それだったら別のことに時間を使うという方たち、ターゲットにならない方たちもいる。ターゲットになる方と、ならない方を見極めつつ周知していくのも戦略かと思う。

会 長：J 委員は、社会的に弱い立場の方がデジタル、ICT を活用して情報を共有したり、社会参加できるよう活動されている。これまで運営協議会では、コロナ過で思うように参集して講座ができない時に、YouTube なども使いながら、生涯学習センターも積極的に配信していこうという議論もしてきた。1 館しかないのでは、ここからどんどん情報発信していこうという意見も出しているが、何か委員から見えているものがあれば、お伺いしたい。世代を超えて届けたいという思いがあり、今回、配布されている生涯学習 NAVI にしても努力はしているが、なかなか伝わらない現状がある。例えば、こんな風に取り組めば、いろいろな立場の方が生涯学習センターを認識し、やっていることを意識してもらえるような、デジタル化、ICT の活用を通じた取り組みはないだろうか。

J 委員：普段、私がやっている活動には、シニアの方たちなどデジタルデバインドを感じている方たちにも、インターネットを使ってもらい、自分の人生を豊かにす

るとか、家から一步も出られない体の状態になってしまっても学び続けられるようにとの思いがあるが、そういった部分も含めて、オンラインで講座なども広めていきたいという生涯学習センターの考えには共感している。生涯学習センターでも、スマホの利用について個別に相談する事業を行っている。個々のスキルを上げて、オンラインの講座やイベントに参加できるようにしていく。こうした個々に対するケアも大切だと考えている。それがないと、いくらオンライン配信をしたところで、シニアの方たちには届かない。個々のケアと講座のオンライン化を並行してやっていけたら、すごくいいと思う。

私はこれまで生涯学習センターをあまり利用したことがなく、事前に資料を読み、「こういうことをやったら、いいのではないか」と思いながら読み進めると、既に実施されていることが多かった。いろいろな事業が行われていて、何よりもつたいないと思ったのは、それを今まで知らなかったことである。やはり、情報が届いていないということがある。情報を知れば参加したい方は、もっと増えると思うし、今、参加している方の満足度を上げるためにも講座のオンライン化は必要だと思う。

個人のスキルを上げつつ、まだ、自信がないという方向けにはハイブリッドでオンラインと集合形式を併用し、自信がついたらオンラインに移行する。こうして、いくつになっても、体の自由が利かなくなっても学び続けることができたら素晴らしいと思う。

また、先ほど、資料を読んで、公民館には横のつながりがあるということを改めて実感したので、せっかくオンラインのメリット、物理的な距離を飛び越えられるというメリットがあるので、横のつながりを活用し、例えば、どこかの館で良い講座をやっているという話があれば、他の地域の方も参加できるような、いろいろな講座を全国的に受けられると良いのではないか。例えば、高齢になって地方から子どもの済む都心部に呼び寄せられた高齢者が、住んでいた地方の講座にオンラインで参加できたりするのも良いと思う。

会 長：オンラインの利点を利用して、行政の枠を超えて学びあうというのも、一つの視点としてはいいかもしれない。公民館の連携という話が出たので、K委員のご意見も伺いたい。

K委員：どこの公民館でも利用率が減っているという話があったが、これは時代の趨勢かと思う。若者が来ないというのも同じような悩みを抱えている。これらの課題にどこも取り組んでいる。取り組みの一つとして、ここでもやっているが、子ども向けの講座。先の話になるが、小学生くらいから、できればもっと前から、ここに通り慣れている人たちは大人になってもここを利用するのではないか。子どもに特化した講座なり、イベントなりを定期的にやっていく。東大和では夏休み期間に一月枠を押さえ、毎日、子どもが集まるようなイベントを

実施している。ちょっと痛みがあるが、そのくらいしないと、駄目かとも思う。

また、市によっては、公民館でお葬式まで始めたという話もあったり、若者に来てもらうために、ニーズの高い学習スペースを拡充したり、生涯学習からずれていくような取り組みもある。どこも、いろいろなことをやってみて、上手くいくか試行錯誤している。小学生でもコンピュータのプログラミングをもっとやってみたいとかいった需要はあるので、何か小学生向けの講座を他部署と提携してもいいので、やってみるような取り組みが必要かと思う。

それからリカレントエディケーションという言葉があるが、現役世代も自分のキャリアを上げたいと思う。職場では仕事に直結した技術だけで、自分をレベルアップさせるには何かが必要だというのは、あると思う。そういったことも考えていかなければいけないだろう。

また、公民館は地域に根付いている事例が多い。町田と比べると1/3くらいの規模のものを、地域にいくつも持っている。地域と密着しているという特徴がある。町田の場合、43万も市民がいて、便利ではあるが一つしかない。それで、例えば、相原地域の住民と密着しているかと言えば、それはとても難しい。そうすると、公民館は待っていないで、出かけていくしかない。地域に出ていく形で進めていかなければならない。どの市も大変に苦勞している。町田も特殊な感じで、便はいいが、市の端に1館しかない。このあたりは考える余地はたくさんある。

会 長：オンライン参加のB委員の話を伺うことは可能か。先ほどJ委員から講座のオンライン化やハイブリッド開催の話があり、今、K委員から地域展開の話があった。市民大学のプログラム委員でもあるB委員に、プログラムを検討する中で、オンライン化の話は出ているのか伺いたい。

B委員：市民大学では、部分的に取り入れているが、本格的にオンライン化するとなると、ポータルサイトの整備などの必要もあり、技術的な制約がある。それに市民大学の場合、受講した市民がいろいろな形でまちづくりに参画していくことも目的としている。市民活動の活性化も重要な役割であり、市民同士の横のつながりを作ることがポイントになる。単なる知識の提供ではない。このあたりはオンラインでは難しい点もある。

一方で、働いている現役世代の方に積極的に参加いただくための入口としては、オンラインは有効だと思う。

また、私は環境講座に関わっているので環境講座の例になるが、市民大学講座を修了して、市民活動を始め、活躍している方は数多くいる。町田市と連携して環境活動に取り組んでいて、こうした方たちの活躍がなければ、町田の環境対策の必要経費は相当、跳ね上がるのではないかと。

こうした修了生の活躍というのは、生涯学習センターの役割として、あまり

大きく取り上げられていないと感じている。こうした方たちを追いかけて、「こんな活躍をしています」というモデルを発信していくのも生涯学習センターとして重要なのではないか。市民にとって、自分が直接、その施設を利用しなくても、まわりまわって、そういう方たちのまちづくりへの参画があり、そういう人材が育ってくれているおかげで、自分たちは安心して町田市に暮らせる。こうした修了生の活躍には、もっと光を当ててもいいのではないか。

会長：B委員は、市民大学のプログラム委員として、テーマや事業内容を企画している。市民大学では、プログラム委員が受講生の意見を聞いたり、社会のニーズに応えたりといった見地で事業の企画に関わっている。今、B委員の話にあったが、市民大学の一つの価値として、同じ空間で学んだ人たちが、市民グループを形成し、それをベースに地域課題を解決する仕組みに参画していくという点があり、全部、オンラインで実施するのは難しいとのことである。一方、土日などの参加しやすい時間に展開できていないので、比較的、時間に余裕のある方が参加しやすいという傾向はある。J委員から話のあった、「いつでも、だれでも、参加できる」という点。余談になるが、テレビから若者が離れた理由に、「番組を見るために、特定の時間にテレビの前に座らなければいけない」ということが考えられない」ということがある。見たい時に、見たいものを、スマホで見る世代なので、教育も「受けたい時に、受けたいものを、受けたい場所で」となってくると、これまでの日時・場所を指定した集合形式というのが、若者の生活リズムに合っていないのかもしれない。

ここからは、各委員に、それぞれの立場からご意見を伺いたい。

A委員：「学習」とついているので、何か真面目な学びしか受け入れてもらえないのかなというイメージがある。そうなると、クラスの中でも、そういう学びについてこられる子は限られてくる。クラスの半分かくらいの子が参加できる、「遊び」が「学び」になるような講座がたくさんあると、若い人たちは来やすくなるのではないか。

例えば、ダイケアセンターのシニアの方々と生涯学習センターや地域のコミュニティセンターがオンラインでつながって、eスポーツとまではいかななくても、対戦でゲームができるとか、単純なゲームでも構わないので、そこにアシスタントとして大学生や高校生、中学生の得意な子が来るような企画。遊びなのだが、外に出るきっかけになるし、若い世代と話をするきっかけにもなるし、孫と遠隔で対戦もできるかもしれない。何かITに馴染むきっかけをつくるような企画があると盛り上がるのではないか。これは行政の企画としては受け入れにくいのかなとも思うが、もう、そういう時代ではない気もしている。ぜひ、何らかの形で、斬新な、若い人とコラボできるような、一緒に楽しめるような、そんな企画ができると、生涯学習センターも変わってくるのでは

ないか。

E委員：私は10年くらい前から生涯学習センターを利用している。最初は公民館だった気もするが、名前に関して思ったのは、周りのお母さん達に「生涯学習センター」と言っても「それどこ？」という反応だった。公民館と言えばわかるのだが。私は中町に住んでいるが、近所のお母さん達でも、この場所を知らない方が多かった。子育て世代の方たちには認知されていないと感じた。

先ほど、「子どもが小さい頃から、ここを利用してもらおう」ことが大事だという話があったが、私は、子どもが赤ちゃんの頃からここを使っているので、子どもは小学6年生だが、勿論、ここを知っている。私は子どもを育てる団体に活動しているので、親がここを利用して、ここで自分が学べて、子育てが充実してきて、そして、通っている間に、子どもがこれから幼稚園児になる、小学生になる、中学生になる、高校生、大学生になる・・・様々な情報や講座があるのを目に止めていると、自分が迷ったときに、例えば、仕事に復帰していても、あの講座があったから受けてみようとか・・・実際に仕事に復帰したお母さんでも、休みを取って講座を受講している方がいる。そういった情報を頭の中に入れておくと、子育てしながら、子どもが成長していく中で、役に立つ時があると思った。そういう風に親が利用していて、子どもが何かにつまずいたり、悩んだりしたときに、生涯学習センターで中学生向けにこういう講座があったとか、高校生向けにこういう講座があったと知っていると、何かのきっかけで、ここは立地がいいので、買い物の時に寄ってみるとかいった機会ができるのではないか。この地域は子どもが増えているので、一人、子どもが行って「よかったな」と思うとお友達を誘ってくるようになるのではないか。そういった子が、高校生、大学生となり、社会人になった時も、何かにつまずいた時に、ここでできた仲間に話せ、学びに繋がればいいと思う。

今、コロナで学習スペースが縮小しているが、以前は、小さい子を連れて、ここで勉強した後で、7階でお昼やおやつを食べて帰ったりしていた。その頃は、大学生や高校生がたくさん来て、勉強したり、ゲームしたりしていた。その様子を見ていて、「町田は、こういった学べるフリースペースがすごく少ない」と感じた。駅周辺にスタバのようなお店が数多く建っているのは、それだけ、学生にスペースが欲しいというニーズが高いからだという話も聞いている。もっと開放して、学べるところで、講座が目に残るようなポスター掲示やチラシの配架をおこなえばいいのではないか。

情報発信でも、行政のチラシは行政の施設にしか置いていないので、普段の生活の中で目に留まる場所にチラシがない。なので、知らないのも当然だと思う。そんなにちよくちよく市役所にはいかないし、この場所を知らなければ、生涯学習センターにも来ない。市民センターも学生はいかないし、若者は何か

の手続きの時にだけ、パッと行って用事を済ませるだけなので、若者など届けたい世代が滞在する場所、目に止まる場所。先ほどスタバと言ったが、スタバはDカフェ（認知症カフェ）をやっていたり、子育てについても力を入れている。そうした届けたい世代や学びに関心を持ってもらいたい世代が過ごす場所にチラシを置けばいいと思う。

F 委員：皆さんは、生涯学習センターがどのような場になってほしいかという視点で話されていたかと思う。私は異なった視点でお話をさせていただきたい。そもそも、生涯学習センターは生涯学習の実践の場だと思う。そうすると「生涯学習とは何ぞや」あるいは「生涯学習に何が求められているのか」という点にもう少しきちんと焦点を当てて考えていくべきだと思う。

例えば、中央教育審議会の生涯学習分科会で「議論の整理」が令和2年の秋に出されている。この中で、生涯学習にはどのような課題があり、今後、どのような形で進めていくべきかまとめている。その中の「現状と課題」で、社会的包摂の実現とか、人生100年時代と生涯学習・社会教育、Society5.0に向けたこれからの生涯学習・社会教育、地域活性化の推進、子供・若者の地域・社会への主体的な参画と多世代交流の推進。このような項目が、現状と課題という形で挙げられている。今回の資料3の中でまとめられている内容はこのとおりだと思うが、最後の検討の視点の中で、やはり、どのような顧客をターゲットにするかということだけではなく、そもそも町田市における生涯学習は何を目指していくかを明確にして、それは地域課題、社会的課題だと思うが、それが何なのかきちんと整理した上で、それを実践する場が生涯学習センターだというような形に論理的にもっていかないといけない。「こういう場がいい」とか「こうやったら人が来る」とかいうことだけで、本来の生涯学習センターの役割が整理されるのかという疑問がある。前回も申し上げたが、例えばSociety5.0に向け、どうあるべきか。先ほどご意見もあったが、デジタルデバイドの問題などは、正にそうだと思う。それからSDGsの問題。これに生涯学習センターがどう取り組むのか。これだけではなく、他にも社会的課題、地域課題はたくさんあると思うが、そこをきちんと整理した上で、具体的にどういう事業をしていくか考えていく必要がある。

G 委員：私は地域による学校支援という立場で、小学校のボランティアコーディネーターをしている。実際に授業に地域の方に来ていただいております、その中で市民大学の環境団体に来ていただき、フィールドワークをしたり、絵手紙を教えていただいたりもしている。このようにゲストティーチャーとして迎え、授業をしていただく時に思うのだが、色々と活動されて、社会還元をされている方がいるが、そういった方々の情報が少ない。生涯学習センターで学ばれ、活動されている方がいるので、そういった方々の情報をもっと有効に発信できないも

のかと思う。例えば、学校支援センターに、こういう方がいると紹介できないか。また、今、学校は夏休みに入っていて、色々な企業や団体が子どもたち向けに夏休みの企画をしている。こうした企画はチラシの配布など、直接、学校に持ち込まれることもある。このような情報の発信の仕方もあるのではないか。まず、親世代が生涯学習センターを知らない。ママたちは忙しくて、なかなか平日に生涯学習センターで学ぶのは難しい。知らないのも当然かと思う。例えば、夏休みに子ども達と一緒に何かしませんかという情報を発信するのは有効かと思う。

それから、生涯学習センターが遠いという話があったが、地域の方の活動を見ていると、皆さん近くのコミュニティセンターで活動されたり、団体を作って活動されたりしていて、自分達の中で完結してしまっている印象がある。何とか、こういった皆さんと繋がって、授業に参加いただけるような展開ができないかと考えている。もっと活動を配信するなど、地域に還元する方法を考えていくといいのではないか。インターネット、オンラインは、そういう意味でも有効かと思う。忙しいママ達でも同世代での繋がりは強くて、ママ友繋がりはオンラインを通して広がっている。ママ達を捕まえれば、子ども達も来るようになるのではないか。

冒頭で報告のあった平和祈念事業では、実は、南成瀬小学校の絵手紙の授業で児童が描いたものを展示している。地味ではあるが、一つ一つ認知されていくような活動を重ねていくことも必要だと思う。

H委員：私は資料3の検討の視点の③が気になっている。誰が担うのがいいかとか、専門性とか実施時間帯とか公平性とか記載されているが、生涯学習センターが主催すべき講座や内容はもちろんあると思うが、講座に来てもらうという視点で考えると、なかなか違う層に働きかけるのは難しいのではないか。もう少し生涯学習センターを実践の場や発表の場として使っていけないかと思った。最終的に届けたい方、今日の議論だと若い方、利用していない方、知らない方が話題になったが、そういう人たちに届けるのは大変だと思う。そういう人たちが興味のあるコンテンツを持っている人にここを使ってもらう方がアプローチしやすいと思う。例えばプログラミングに興味を持っている子が多いのであれば、プログラムのできる団体にここを使ってもらい、ここでイベントをやることを周知してもらおうというのが、アプローチしやすいのではないか。主催講座だけでなく、色々な人がここで講座をできるようになるといいと思う。主催事業を見ると、量が多く、内容も幅広い。新しい層に働きかけようとするとこれ以上に増えることになる。生涯学習センターで主催する方向から生涯学習センターを会場に使ってもらう方向に少しずつシフトしていけばいいと思う。

I 委員：私は長野県の出身で、住んでいた地域には公民館とは別に会館があり、市民が自由に使えるスペースになっていた。そこで開催していたイベントは、知らず知らずのうちに知っていたことを、今日の話聞いて思い出した。なぜ知っていたか振り返ってみると、会館で勉強していた時に、ポスターが目に入ったり、学校に地域でやるイベントのスタッフ募集の依頼があったりして、それをきっかけに知ったのだと思う。例えば、平和祈念事業の様な事業に、お手伝いしてもらってスタッフとして、小学生・中学生・高校生・大学生を巻き込んでいくのも、周知の意味でも利用してもらって意味でも効果的なのではないか。

J 委員：先ほども少し話したが、色々な年代の方がいて、必要としている方とそうでない方がいる。周知の方法もターゲット別に分けて、全体にチラシを配布するようなやり方でなく、この世代にはこの周知方法、若い世代にはSNSで発信したり、学校にチラシを配布したりと、分けて展開するのもいいと思う。講座の内容も同様にターゲット別に振り分けて考える。例えば、シニア向けの講座ならスタッフに若い方に入ってもらって世代間の交流を図るのもいいのではないか。

先ほど、他の委員からも話があったが、生涯学習センターは大きな施設で部屋も多い。だが、ここで待っているだけではだめで、地域連携の強化も方針に書かれているが、地域で活動している団体や支援センターなどの来館者とも関係が持てるようにマッチング、ハブ機能を強化し、地域団体とコラボしていくべき。生涯学習センターから飛び出して、地域団体のフィールドでコラボし、展開していけばいいと思う。オンライン化については、推進することで、講座を受講できる方を増やしていけばいい。

K 委員：今までも見直しの方向性は皆さん、議論してきていて、「ああしたらいい」、「こうしたらいい」という意見はたくさん出ている。

ただ、生涯学習センターでは、毎年、事業評価をやっている。評価して、振り返りもしてきている。私も生涯学習センターに来ることが多いが、ここから見直しとなると、どうしたらいいか。職員も目一杯に見えるし、施設も大きい。他市は、小さい市でも施設を5つも6つも持っている。小さい施設がたくさんあり、総合すると町田よりも部屋数も多い。町田は43万いてこれだけである。施設も限られていて、ここから見直しとなり、どう考えたらいいかとなると、事業をプラスしていくのは難しいと思う。見直しなのだから、事業を整理して、どの事業を重点にするのか、場合によっては、事業の縮小・カットも考えなければいけないのではないか。

生涯学習センターが、生涯学習を推進していくために、どうしても負わなければならない部分がある。青年学級にしる、なんにしるあるわけである。それから、今後、生涯学習センターとしてどういう方向にすすみたいのか。「市



民ニーズにあった」ということだろうが、市民参画型。市民が企画し、活動していくところに力を入れるとか、社会還元。いわゆる地域の課題解決につながるような講座を実施していくなど、いろいろあると思うが、そういうところに重点的に力を入れていく。こうしたバランスまで考え、整理しないといけないのではないか。施設がこれだけしかなくて足りないのであれば、連携し、地域に出かけていく。先ほどハブ機能の話もあったが、そういう機能も負わなければいけない。

もう一つ、宣伝の方法だが、今、話のあったターゲット別に取り組むという話、その通りだと思うが、広報のスタイル自体が同じだと感じている。今回、ことぶき大学の募集案内や生涯学習NAV Iが配布されているが、手元に去年や一昨年の冊子があったら、区別がつかない。マンネリ化しているのではないか。開けてみても、一つ一つの講座はその時代にニーズに合わせているが、全体の組みは同じような感じで、いろいろなところでマンネリ化している。これまでやってきて、特に問題がないから、そのまま継続している。そういったところも見直しが必要なのではないか。

「これがいいから、やりましょう」では見直しにならない。デジタル化など大切なことはいくつもあるが、プラスしていくだけでなく、痛みを感じることもやらなければならないと感じる。

それから市の職員がやっている以上、どうしても異動がある。そこも見越して、どうしていくべきか考えていく必要がある。

B委員：先ほど若者の話があったが、私は大学で「市民」という授業を受け持っていて、半分は市民論、半分は市民活動の紹介をしている。その中で、生涯学習センターの見学も入れている。印象に残った回を学生に聞くと、生涯学習センターの見学を上げる声が圧倒的に多い。施設に関する関心は高いことが伺える。ただ、学生自身は、大学という、もっと自由に使える施設を持っているということもあり、今の学生は忙しいということもあって、地元に戻って何かをやるという時間はあまりない。ただ、こういう施設があるということに、学生は驚いていて、こうした体験が、後に、市民になってからの彼らに影響してくれるといいと思っている。一度、こういう施設を使い、味を占めさせると、それなりに若い人でも引き込まれる要素はあるのではないかと考えている。そういう意味では、中学生や高校生、このあたりが行政が把握できる最後の世代だと思うが、この世代に向けたイベント、例えば、「まちづくり」をテーマにしたものなどやって、面白いという体験をさせるのも一つのやり方だと思う。

それから先ほども話したが、市民大学の様な講座を修了した方が地域で活躍することは重要だと考えている。直接、この施設を使わなくても、市民にとって生涯学習センターが役に立っているという視点も重要だし、学習者の意

欲を高めるモデルを考える上でも重要である。

会長：A委員の話にあった、もともと学習に縁遠い人たちを引き込むためには、あまり堅苦しくなくていいのではないかという意見はさすがだと思った。実は11月に鶴川市民センターで、カーレースゲームを引きこりの若者と障がい者と高齢者を結んでやってみようという話がある。市民センターの職員と話をする、職員が直接、SONYや任天堂と話をするのはなかなか大変なようである。こういう時、間に民間が入ると話がスムーズにいくことがある。直営に拘らずに、もう少し柔軟に民間や市民と連携していくことも重要だと思う。どうしても、土日動けない、夜間動けない行政が何かをする難しさはある。「まちチャレ」についても、あまりお行儀のいいものだけでなく、少しやんちゃなものがあってもいいのではないか。私自身そうだが、学校でまなんだことだけでは、今、ここに座っていない気がしている。学校で学べなかったことを地域でどれだけ学んだか、関係性を持ったかということは、自分の中で大切な要素になっている。若者たちが何を学んでみたいか聞いて、大人がちょっと眉を顰めるような内容であったとしても、取り組んでみることも必要かと感じた。

副会長：途中からの参加となってしまう、申しわけない。皆さんの話も途中から伺っていて、また、オンライン参加中、一部音声が乱れて、聞き取れていない部分もあることは了承いただきたい。

皆さんからの意見は、多岐に渡っていると感じている。今日は比較的自由に発言いただいているが、この先、出していただいた意見を元に、更に具体的な中身について議論をしていくことなると思う。事務局で今回の意見を集約し整理したうえで、次回、資料として提供されると思うが、あまり話を広げてしまうと落としどころがなくなってしまう。今年度は会議の回数が限られているということもあるので、事務局で、いただいた意見をまとめる際、次回、具体的にどうしていくのか議論できる形で準備いただきたい。

先ほど話があったが、何を目指していくのか明確にした方がいいというのはその通りである。実際には、あり方見直し方針の中で、センターの目指す姿が出されているので、おおよその方向性としては、そこを共有しながら議論をしていくことになると思う。ただ、この「目指す姿」で、必ずしも全てが言い尽くされているかというと、そうでもない部分はある。「目指す姿には書かれていないが、こういうことも大事で、今後のプログラムにおいて、こういった部分について見直しを図っていくべきだ」といった意見もあっていいと思う。ただ、下地として、あり方見直し方針のセンターの目指す姿を実現していくため、近づいていくために、どう事業の見直しをしていくか。これは先ほど話のあった、何を指すのか明確にしていくことに重なる部分がある。まずは見直し方針をベースにしながら、我々はどこを目指しているのかを念頭に置いて

議論をしていくことが、次回以降必要になってくると思う。

具体的には、どう周知していくかという宣伝のこともいろいろとご意見が出ていたし、或いはオンライン化の話、アウトリーチの話、市民参加型の話も出ていたかと思う。どういった方向性が出ているのか整理してもらい、それに即した議論をしていくことなると思う。

私の個人的な思いとしては、今回の資料3に気になる表現があった。それは何かというと「顧客」という言葉である。生涯学習センターの利用者はお客さんではない。生涯学習センターの持ち主は市民である。社会教育では、公民館は市民のものだという前提で、戦後ずっと住民参加ということをベースに運営してきた。なので、都道府県は公民館を設置できない。必ず市町村が、住民に近い基礎自治体が設置することになっている。それは前提として、住民参加をするからである。なので、市民を「顧客」として捉えるのではなく、市民が使う、市民の持ち物であるということを大前提に、センターの目指すべき姿、事業のあり方を議論していった方が、市民参加といった部分に関わってくるのではないかと感じた。

皆さん、本日はたくさんのご意見、ありがとうございました。これをベースに今後、具体的な検討に入っていくので、よろしくお願ひしたい。

## 5 その他（1）2022年度運営協議会開催日程について

事務局から、資料4記載の日程が提案され、承認される。